

数々の問題に立ち向かう

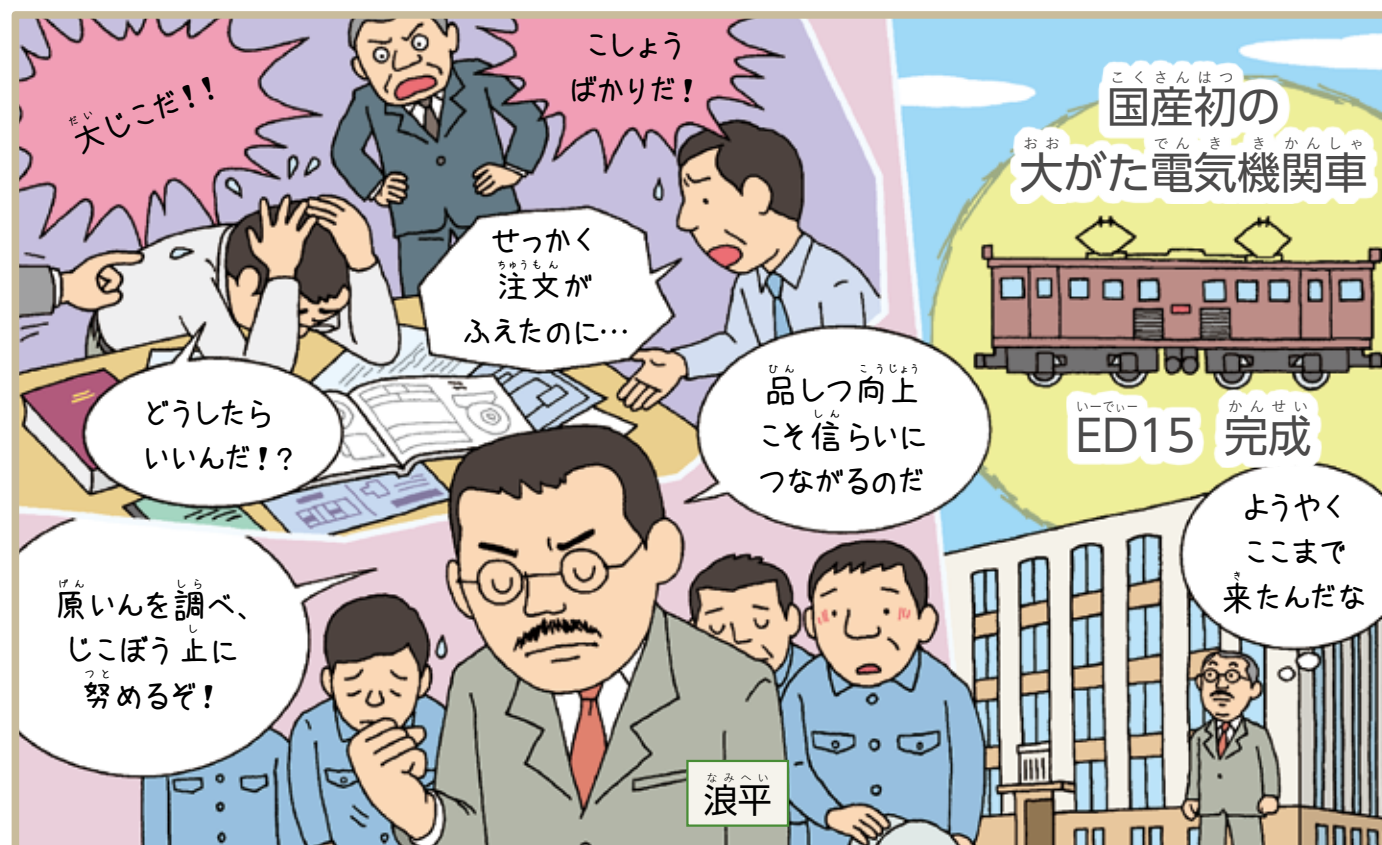


日立製作所ができた始めのころは、注文がなく苦しい時期もありましたが、浪平たちは地道な仕事を続けていきました。1914年(大正3年)に第一次世界大戦が始まり、外国製品が日本に入ってなくなると、日立製作所に注文がくるようになりました。しかし完成した大がたせい品にこしょうなどがたくさん出てしまい、浪平は追いこまれます。

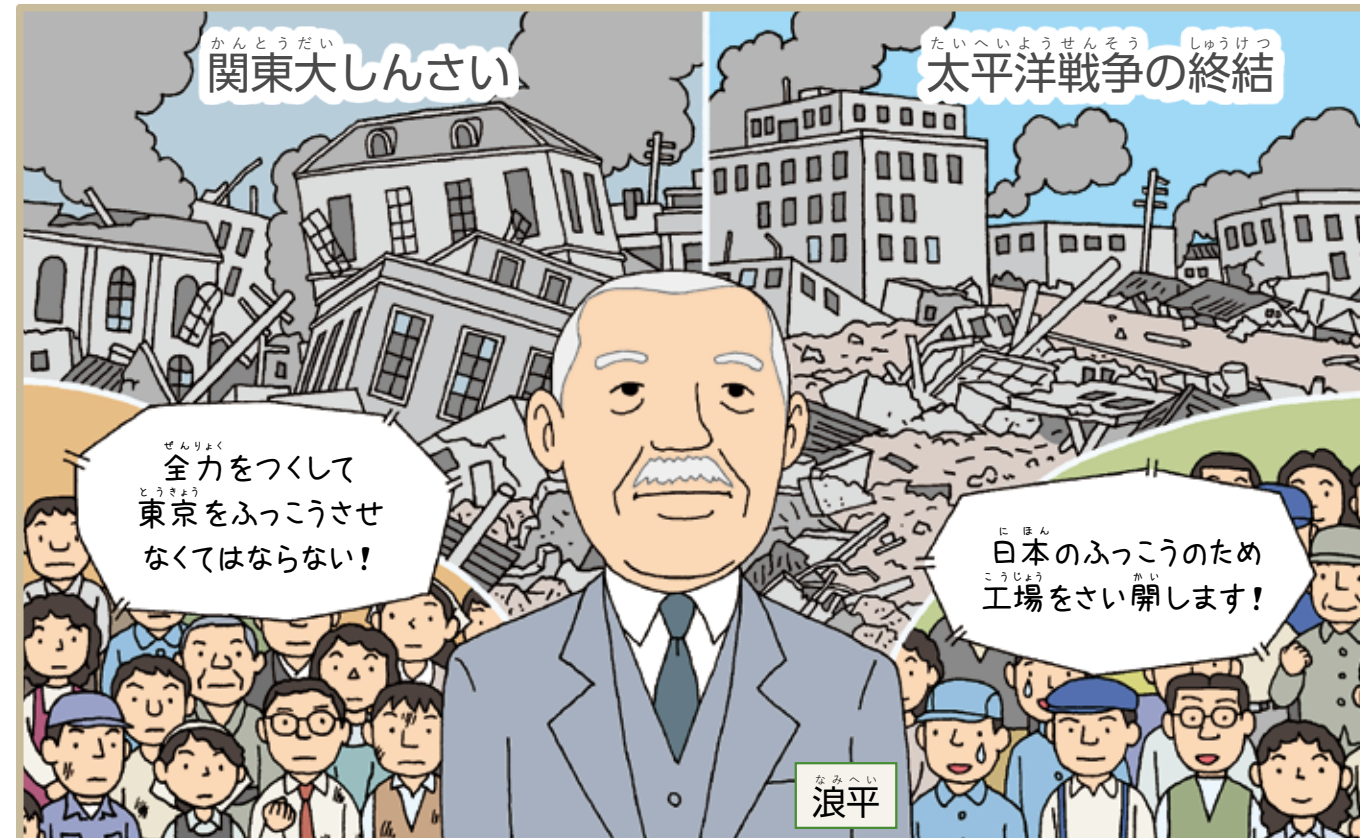
「どうしたらいいんだろうか」

なやんだ浪平が出した答えは「品しつの向上こそが信らいにつながる」ということでした。日立製作所のなかに、こしょうの原いんを調べるためのせん門の部をつくり、ていねいに失敗の原いんを調べ、研究し、次のせい品づくりに生かしていき、日立製作所は順調に信らいを得ていきました。ところが日立の工場が火事で全焼してしまいます。くり返しくり返しピンチが訪れますが、そのたびに浪平は立ち上がり、良いせい品をつくるためにこつこつと努力を続けます。

そして1924年(大正13年)、当時の日本ではつくることができないと言われていた大がた電気機関車を完成させて世の中をおどろかせます。その後、鉄道車両の注文を受けるようになるなど日立製作所は順調に成長し、日本有数の大会社になっていきました。



社会にこうけんした一生



何度かべにぶつかってもあきらめない。浪平の不くつのせい神の原動力は、「社会にこうけんしたい」という強い思いからでした。

1923年(大正12年)に関東大しんさいが起きたとき、東京は電気関係のしせつにおいても大きなダメージを受けました。そのとき浪平は、「ふっこうが最ゆう先だ」と話し、他の地方からの注文を全てことわり、全工場一丸となってふっこうに力を注ぎます。その結果、地しんからわずか10日後に、東京駅からお茶ノ水駅間に電力がきょう給されて、電車が走り出しました。

こうした活動を通じて、日立製作所は高い信らいを得ていきます。かつては外国せいの機械ばかりを使ってきた日本の会社も、少しずつ国産の機械に目を向けるようになります。

しかし1941年(昭和16年)に太平洋戦争が始まると、全国の日立製作所の工場のほとんどが空しゅうで焼けてしまいました。そんなぜつ望の中でも、戦争が終わると浪平はまた立ち上がり、残った機械をかき集めてふたたび日本のふっこうのために工場をさい開させました。

その後浪平は1947年(昭和22年)に73才で会社を引たいし、77才でなくなりました。浪平の信念である「すぐれた自主ぎじゅつと良いせい品で社会にこうけんする」という日立せい神は、日本を代表するそう合電機メーカー、株式会社日立製作所として、日本のみならず世界の人々のくらしと社会をささえる会社へと発てんした今の時代にも受けつがれています。